

＜原著＞マタニティドライビングが母親とその胎児に及ぼす影響 第1報：実態調査

著者	佐藤 喜根子, 佐藤 祥子, 堀川 悦夫, 高林 俊文
雑誌名	東北大学医療技術短期大学部紀要 = Bulletin of College of Medical Sciences, Tohoku University
巻	9
号	2
ページ	181-186
発行年	2000-07-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/33736

マタニティドライビングが母親とその胎児に及ぼす影響

第1報 一実態調査一

佐藤喜根子, 佐藤祥子, 堀川悦夫*, 高林俊文**

東北大学医療技術短期大学部 専攻科助産学特別専攻

*東北大学医療技術短期大学部 総合教育

**東北大学医療技術短期大学部 看護学科

Influence of Maternity Driving on the Pregnant Women and Fetus

The First Report — Fact Finding Survey —

Kineko SATO, Sachiko SATO, Etsuo HORIKAWA*

and Toshifumi TAKABAYASHI**

Course of Maternity Nursing, College of Medical Sciences, Tohoku University

**General Education, College of Medical Sciences, Tohoku University*

***Department of Nursing, College of Medical Sciences, Tohoku University*

Key words: 妊婦, 運転, シートベルト, 不安

There are many women continuing driving even during pregnancy, where driving is extremely common in Japan. This is to report on an actual situation of pregnant women's driving (maternity driving).

The subjects of the survey were 394 pregnant women who had regularly consulted at T Hospital. The number of those who had obtained driver's license was 376 (95.4%) and driving during pregnancy was 272 (72.3%) and 135 (50.3%) out of those continuing driving during pregnancy answered that they had driven feeling uneasy. The top three descriptions of their uneasiness were as follows:

- ① A baby might be crushed in case of an accident
- ② It is not easy to take a quick action due to slower movement than in the ordinary health condition.
- ③ Threatened abortion/premature delivery might occur.

And what they had paid attention to when driving during pregnancy were;

- ① Try not to drive fast
- ② Make careful safety checks
- ③ Shorten driving time

I. はじめに

わが国では今や18歳以上の女性の40%以上が自動車の運転免許を取得し¹⁾²⁾、生活の手段として運転が必要不可欠な時代になっている。それゆえ女性が妊娠し、その期間中に運転する機会も当然多いことが予想される。しかし妊娠初期はつわりや起立性低血圧や頭痛など不定愁訴も多く、また妊娠中・後期は大きくなった腹部の機械的な障害等により、運転することへの弊害の出現も考えられる。これらのことから妊産褥婦の運転の保健指導は重要なポイントであるはずなのに、その是非に関わる科学的裏付けを明確にする資料は僅かにあるのみで^{3)~5)}、経験的に保健指導を行っているのが現状である。

一方丸山等⁶⁾は、運転適性として二つをあげている。判断・動作の正確さなどの認知・反応機能の心理的適性と感覚・動作の基本的な働きである反応時間と視力の免許適性である。そこで今回我々は、これらの心理的適性や免許適性が妊娠や産褥期にどのように変化するかを知るために、妊婦の運転の実態調査と意識調査を行った。

II. 調査方法及び対象

平成10年12月から11年12月中旬までに、東北大学医学部附属病院の妊婦外来を受診した妊産褥婦に、独自に作成したアンケートを受診者にその主旨説明を行い、賛同が得られた後、その診療待合時間中に自記式にて回答してもらいその場で回収した。

対象者は妊産褥婦合わせて394名であった。その属性は初産214名、経産180名であり、妊娠週数別では、初期43名(10.9%)、中期125名(31.7%)、末期188名(47.7%)、産褥期38名(9.6%)であった(表1)。

表1. 対象者の属性

初産・経産別		妊 娠 週 数 別			
初産	経産	初期	中期	末期	産褥期
214	180	43	125	188	38

III. 結 果

1. 運転免許の保有割合と運転状況

運転免許保有者は376名(95.4%)と、ほとんどの妊婦が所有していた。免許取得後年数は平均で9.5年。5年未満は122名(32.4%)、5~10年は109名(29%)、10年以上は145名(38.6%)であった。全くのペーパードライバーは19名(5%)であった(図1)。

妊娠中(褥婦にたいしては過去、妊婦に対しては調査時期も含む)に運転を継続しているかどうか尋ねると、免許保有者のうち272人(72.3%)が実施していた。初産と経産の割合ではほぼ同数であった。

2. 妊娠中の運転の不安

妊娠中に運転を継続している者の中で、不安を持ちながら運転を行っている者が135名(50.3%)であった。初産と経産別では、前者が66名(48%)、後者が69名(51%)とほぼ同数の割合であった。その内容は ① 事故の時に赤ちゃんがつぶれそうで怖い ② 後進の時に後ろの確認に振り向きづらい ③ 体が重くなり瞬時に動けない等であった(図2)。

3. 妊婦自身が考える運転可能な時期と運転の理由

褥婦と妊娠後半期の妊婦は自ら中止した時期を含んで、一週間に一回以上運転すると予測した場合を想定して尋ねると、「36週まで」が122名(45%)、「37週以降も継続し、運転が出来なくなる

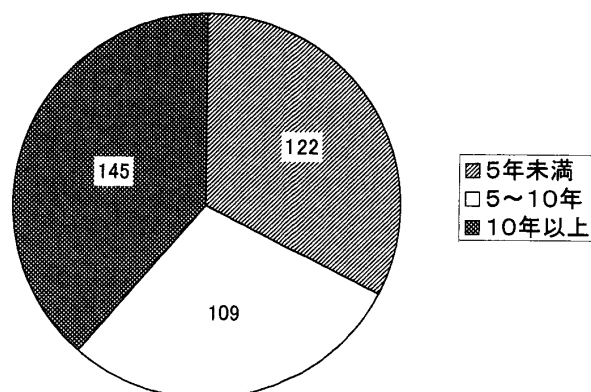


図1. 運転免許取得後年数

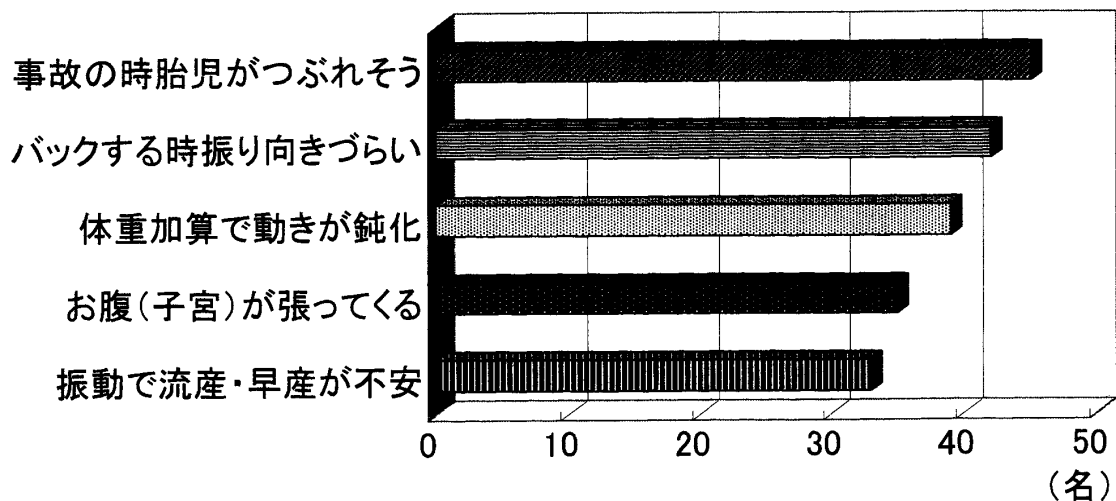


図2. マタニティドライビング時の不安の内容

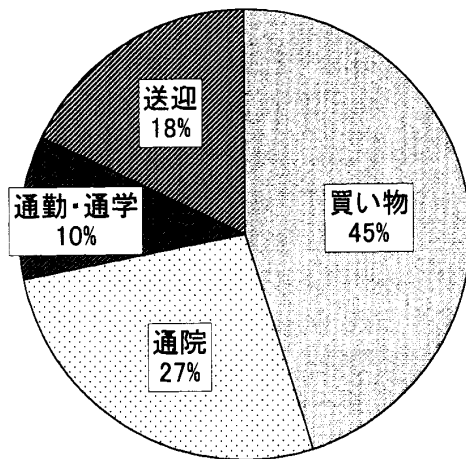


図3. 運転の理由

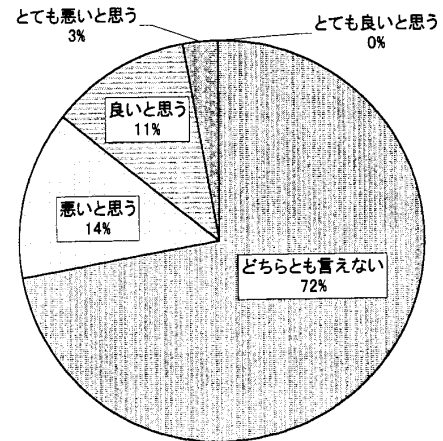


図4. マタニティドライビングの自己意識

まで」と答えたのは114名(43%)とほぼ同数であった。

運転の理由は ① 買い物 ② 通院 ③ (子供や夫など家族の) 送迎 ④ 通勤・通学等であった(図3)。

4. 妊娠中の運転を自身がどう思うか

“とても良いと思う”“良いと思う”“どちらともいえない”“悪いと思う”“とても悪いと思う”の5段階評価で尋ねたところ、大半が“どちらとも言えない”と答え、残りが“良い”と“悪い”が等分であった(図4)。

同様の内容を家族の意識について、(妊婦が運転

することに家族がどの様に考えているか) 尋ねたところ“どちらとも言えない”と思っている者が多かった。

5. シートベルトと交通事故について

シートベルトの着用率は“する”217名(61%)，“しない”86名(24.1%)，“時に応じてする”54名(15%)であった(図5)。

免許取得後の交通事故では“あり”が132名(33.5%)であった。このうち平成11年の調査の54名(初産29名・経産25名)のうち免許取得後10年以上で多発していた。また事故の発生時期をみると、非妊娠時が113名と圧倒的に多かった。しかし妊娠中も17名が事故を起こし、産褥期は1名

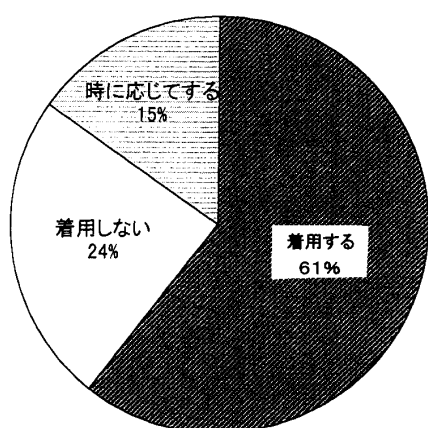


図5. 妊婦のシートベルト装着率

であった。そして事故回数は1回が多いが、2回、3回の経験者もあった(表2)。事故の内容は ① 衝突(柱・壁・車等にぶつけた) 87名、② こすった 43名 ③ 追突された 26名であった。中には免許取得して5年未満で、非妊娠時に3回、妊娠中も

表2. 交通事故経験の時期と回数

	全体	件数			
		総数	1回	2回	3回
非妊娠時	113	48	35	9	4
妊娠中	17	5	4	1	0
産褥期	1	0	0	0	0

2回(調査時34週の妊婦)、塀に衝突、対向車と接触、停止車に追突を経験した者もあった。しかし本人も家族も運転することに(良いとも悪いとも)“どちらともいえない”であった。

6. 妊娠中に自覚した精神・肉体的変化

非妊娠時と妊娠した後で自覚した変化では、“いらいらする”が75名(60%)、“集中力が低下した”60名(49%)、“動きが鈍くなった”57名(46%)、“視力が悪くなった”25名(20%)の順であった(図6)。

IV. 考 察

運転免許の保有率は回答者の95.4%と極めて高かった。これは一律に説明しながら配布したものではあったが、説明不足等により運転を実施していない者が未提出ということもあったのではないかと考えられる。しかし最新の日本人の運転免許保有率データ推計によると⁷⁾、20歳代では87%、30歳代では92%、40歳代では84%であるということからみれば、極端に高いという値ではないのかもしれない。新興住宅街が郊外に広がってきており、バスが主要な交通手段である地域性から考えると、自家用車での移動は不可欠となり、自然に運転免許保有率が高くなることが推測される。このことは妊娠中の運転継続の多さにも影響していると考えられる。初産と経産で差がみられ

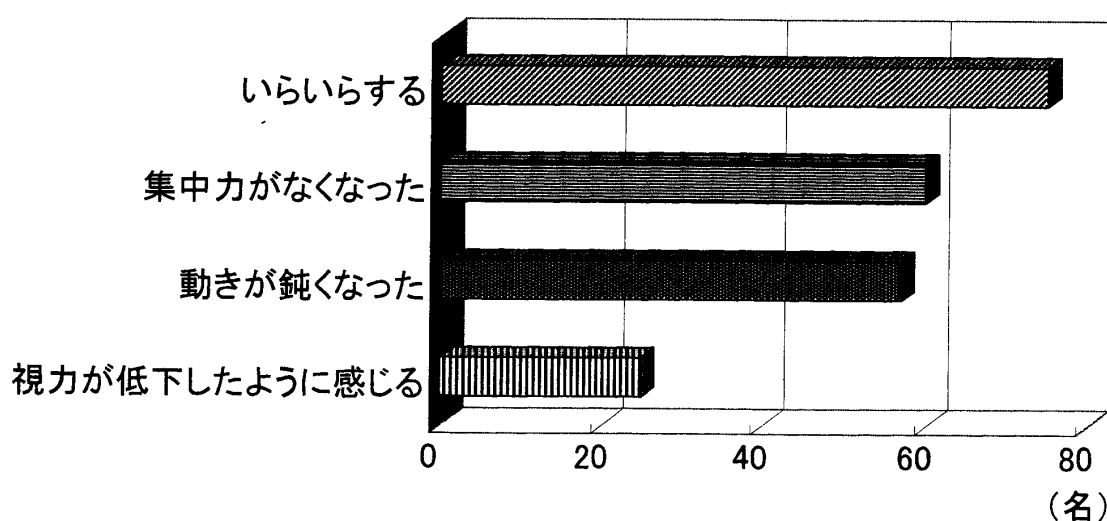


図6. 妊娠中に自覚した精神・肉体的変化

ないというのも、運転の用途には差がないことを示すと考えられる。

そしてほとんど大半の妊婦が妊娠末期（少なくとも 36 週頃）まで運転したいと考えている。つまり生活の必要に迫られて運転をする機会が多いことを立証していると考えられる。現に運転理由が買い物や通院、送迎であった。

しかし運転する妊婦の半数が不安を有するということは、妊娠初期はつわりや低血圧等の不定愁訴と同時に、流産の危険性への不安が大きいものと考えられる。また妊娠中・末期は 32 週頃より急に大きくなる腹部（子宮）による体型の変化で、バックする時に後ろを振り向くのにお腹がつかえたり、体重増加による瞬発力の低下などを自覚することにより、不安が増大するのではないかと考えられる。これらの不安はストレスとなり、動作に制限を加えたり、ホルモンや代謝の変化を起こすなど^{8)~10)}、交通事故の誘引や胎児発育等への影響が考えられる。

実際に交通事故の経験者も予想以上に多い。これは生殖期を包含する年齢層別(男女合わせて)交通事故で 16~39 歳までが事故全体の 55.2% を占めている¹¹⁾ ことから容易に予測出来ることでもある。そして事故類型別の多くが衝突、追突である。人対車両は少なく、車両単独か車両相互、車両対物の傾向は全体の事故類型別傾向と同様であった²⁾。

しかし一方ではシートベルトの装着率が一般の 86.6%（一般道路運転手：H9）²⁾ に比べ、妊婦は 61% とはるかに低い。日本では道路交通法第 71 条 3 項に、妊婦のシートベルト着用の免除記載があるが、自動車運転中並びに乗車中にシートベルトを着用することで事故時の死者数が年々減少傾向にある¹²⁾ という事実からも、安全性の面から考えるとむしろ推進の方向で考えたほうが好ましいと考える。しかし妊婦の未装着の多くが「苦しいから」等と不都合を訴えている。かつて事故発生時にシートベルトを装着していた妊婦が常位胎盤早期剝離を起こしたとの報告を記憶している。安全で安楽なベルトの工夫が不可欠である。また米国でもアメリカ産婦人科学会では自動車が生活に

必要不可欠であるとの観点から、『妊娠中の正しいシートベルト着用法』のパンフレットを作り、積極的なシートベルトの着用の啓蒙を行っている¹³⁾。日本でもやっと最近妊婦のシートベルトの重要性について認識される様になり、苦痛を緩和するベルトの工夫などが提唱されるようになってきた。同時にシートベルトの重要性に関しては、乳幼児にもその安全性ゆえに法制化されるに到っている¹⁴⁾¹⁵⁾。

また妊娠中の身体的な変化は既述の如くで、運転することへの不安材料となっているが、精神的にも“イライラ”や“集中力低下”の自覚は大きな問題であるといえる。ホルモンの働きによるものが考えられるが、運転して生じるマイナーな因子の不安がまたその誘因となっているのを否認ない。その意味でも妊娠することで何が変化するか、運転の適性はどうかあるべきなのかを検討することは、とても意義深いことであると考えられる。

V. おわりに

今回の調査では、運転免許保有率は予想外に多かった。そしてマタニティドライビングに関しては、多くが不安を持ちながらの運転ではあったが、生活上必要不可欠という状況下で、大半が妊娠末期まで継続しようと考えていた。しかし非妊娠時を含めて交通事故経験者も多く、また運転に対する不安を訴える者も多くみられた。

以上より妊婦の運転は日常生活の延長線と考え、特別な理由がない限り中断させるということではなしに、シートベルトの安楽な着用方法を工夫したり、運転時間は慣れた地域で最少限度とするなどの個別的な指導が大切である。

文 献

- 1) 総務庁編集：交通安全白書(平成 8 年度版)，大蔵省印刷局，1996，p. 11-36
- 2) 総務庁編集：白書の白書（平成 10 年度版），大蔵省印刷局，1998，p. 60-69
- 3) 加藤 俊，河野勝一：交通機関利用妊婦と産科異常，ペリネイタルケア，4(8)，124-127，1985
- 4) 山下直美，玉置昭子，村井禎子：妊婦の自転車・

- 自動車運転に関する検討, 母性衛生, **29**(3), 273-278, 1988
- 5) 緒方永太郎, 斧原有由子, 木村奈緒美: 妊婦の自動車運転, 東京都医師会雑誌, **47**(1), 42-47, 1994
- 6) 丸山欣也: 適性・事故・運転の心理, 企業開発センター交通問題研究室, 1995, p. 4-17
- 7) 朝日新聞: よりどころ「市民証」身分証明書としての運転免許証, 2000 年 4 月 12 日
- 8) 堺 章: 目でみるからだのメカニズム, 医学書院, 1994, p. 58-101
- 9) 坂元正一, 水野正彦, 武谷雄二編: プリンシプル産科婦人科学, (株) メディカルビュー社, 1998
- 10) 矢嶋 聰, 中野仁雄, 武谷雄二編: NEW 産婦人科, 南江堂, 1998
- 11) 佐藤和夫, 藤本征一郎編: 臨床エビデンス産科学, (株) メディカルビュー社, 1999
- 12) 朝日新聞: 妊婦のシートベルトやっぱりしめた方が安全?, 1999 年 9 月 4 日
- 13) 妊娠中の正しいシートベルト着用法: The American College of Obstetricians and Gynecologists, 1993
- 14) JAF, MATE: チャイルドシート, 日本自動車連盟, 2000, p. 10-14
- 15) 道路交通法: 警察庁交通局, 第 71 条の 3 第 4 項